

## 飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

### 第 464 回 「頑張らない人生」への決別を誓う

2012. 3.18

世間ではもう、定年の歳だ。  
こんな歳になってもまだ、誰に言われるまでもなく、色々なことを自分に課してきた。  
やりすぎと思うほど、あたかも被虐的に、エンドレスの繰り返し...である。  
もう、そんな若くないのだから、楽になろうよ、  
そんな甘言に乗るまいと、耐え続けているように見える。  
人間「楽」を覚えたら、どうしてもその方向を求めてしまう。  
ご多分にもれず、僕も弱い人間だから、きっと、そうなるに違いない。  
だからあえて、自らを、そうでない環境へ導くしかない。  
そんな思いで、新たな課題をどんどん作りつつ、必死になってこなしている。

「頑張らない人生」...なんて本が山積みになっている昨今、  
何でそんなに頑張るのだろう。

毎日いつも、視線を感じる。それも数多くの視線だ。  
僕の周りには、じっと、僕の背中を見ている人が沢山いる。  
そんな人たちに、「きっといつかは分かってもらえる...」  
そう信じて自らを厳しくやってきたつもりだ。  
もし、僕自身の蝶(たずな)が緩(ゆる)んでしまったら、皆もそうになってしまうだろう。

ボスが頑張っているから、俺も頑張ろう...  
少し時間はかかるけど、そんな人が一人ずつ、増えていった時、  
僕という人間の、存在意義が少しだけあるのかなぁ...？  
そんな瞑想の中で、毎日を過ごしてきたような気がする。

実態は...、僕の思いは、中々彼らに伝わらない。  
だからもう一度、また新たな課題を加え、繰り返し、何べんでもやってみる。  
それでもやっぱり、止めるわけにはいかない。

... 指導者はロウソクの火、  
周りを明るく照らすが、  
自分の身をすり減らし、やがて静かに燃えつくす...  
確か、城山三朗(小説家)の言葉だったと記憶する。

心が通じ合い、自分の部下と共鳴できる...  
言葉ではいかにも心地よく響くが、現実的には難しい。  
この歳になってもまだ、僅か数人のスタッフの「心」すら、十分に掌握できないでいる。  
彼の、彼女の目の輝きを見るまでは、止める事ができない使命であると思いつつ、  
「頑張らない人生」への決別を誓う日々である。